諸藩世説

乙

誹諧世説巻之五

目録

路通蕉翁の勘氣を受て鬼貫が説
杉風無季の句を吟ずる説
越人旧情の句を吟ずる説
去原妓女奥州が説
梅員の句蕉翁一見の説
北枝従吾が命終を歎説
風國集の題号を誤説

三碧所藏

諧諧世說巻之五

路通蕉翁の勸氣を受て思ひ貫ぬく說

路通ちりとりあるゝ者なりしかつて放蕩の性なり
況や人の下ふぶり外をとり紙衾の情をもて
ふたゝび世に出るをとゝ仕侍り又翁の志よりた
ゞいくもゞ〳〵師弟の義を結ぬる翁ども翁の後嗣
ちゝ紀行に芸藻をとゝのゝ紀門にして八昔のよろこみ
をうけれをる此ゆへ路通ら芭蕉翁行狀記よりも紀
のをなをゝ翁ら猪平の出れの文をもる秀〳〵

諸色事へ大坂にて還信いたし生涯のあ[illegible]
[illegible]人を志こゝ以前よりたゞ人来るのに[illegible]
ふたゝびとも西方極園のまゝにあれ後ゝく
[illegible]へど平生の人あて人常の人が居のるを[illegible]
何の不實の活産あるべくや拙[illegible]
仕まつくゝ信て[illegible]
[illegible]

二月十八日
越水稜

[illegible]の詩[illegible]もあるて其罷を殺さるゝ[illegible]
[illegible]故て翁終雪の砌を[illegible]
[illegible]所の人くと共ふ投の[illegible]
事も物紀て拜[illegible]
の義仲寺て翁の遺器法命[illegible]時路通大津の
使者紙[illegible]ひて[illegible]席を[illegible]
[illegible]て古人を罷[illegible]乃智豈拔舌のみ
なゝんやあるひを路通器貫が[illegible]
是を情ゝ器貫[illegible]

ちる書ありて大なる伽羅の冠貫を蕉風とかくだ
と人ども其比伊丹の冠貫と人の称ぜしそれし
なる賢者なれ況者なる流行なるべし時一女郎
高家のおもひものあと嫉妬する人有て冠貫かと
くあるを守りて是ばかりまで風流の人た
ちもれたの中人流行豆よりしなるれるみくるせ
んやまして路通も巧る者と行て風流の人と對
ひるぬ巧ばかりかかれるもうたるの人の忘れ
冠郭なるる紙なるべし　古書に曰詩人志をいふと

洒落ふるまひも又和さうんや

箱のり物をはこみるまでもむつかし

同子ならや海きく〳〵小の秋　路通

敦賀にて

あつさものとも志ぬ花ざかり　紳逸　晨貫

杉風無季れ白と吟ずる説

杉風を東武に居して箱の東行紙むつかしくと

く志をはこぶ〳〵なる言葉ありしの

古池や蛙とびこむ水の音　芭蕉

と点ぜれ吟ずれ杉風が別墅深川に向ふ

以来の居てのるまして其古池は今江のうつて

池をとるぬ一とせ箱のり物を送りて深

く徇之ゆゑ送別れ白子

行くゝ秋くゝ吹風もあるなり　杉風

く毎年れ白吟しなりそ是ゆゑ紙なく

しくをのづゝ其情の白と吹るとして事

の物はも所を行ることは白紙学はしの

序に京堂ゝ云ふ白秋ゆゑ作者と

されば只只よするなれあはれなるを称しはべりさ
まくよう雑の句乃ちすハ翁の生前に始法あるべ
からながバの句あるハ俳譜なれ句と製し俳諧体を
其時も古人をもぐりて其格をたゞしへしぬハす
是をもつて去来杉風凉菟などが雑の発句せし
する事て是人蕉門の一格なる紙今の俳諧を責
このかみ雑の発句を発句も雑あらんとする己
が細くんはさなるゞく此からあらく当時も好み
てつねぬ此すハ古くも去ればゞく翁の生前ひそか

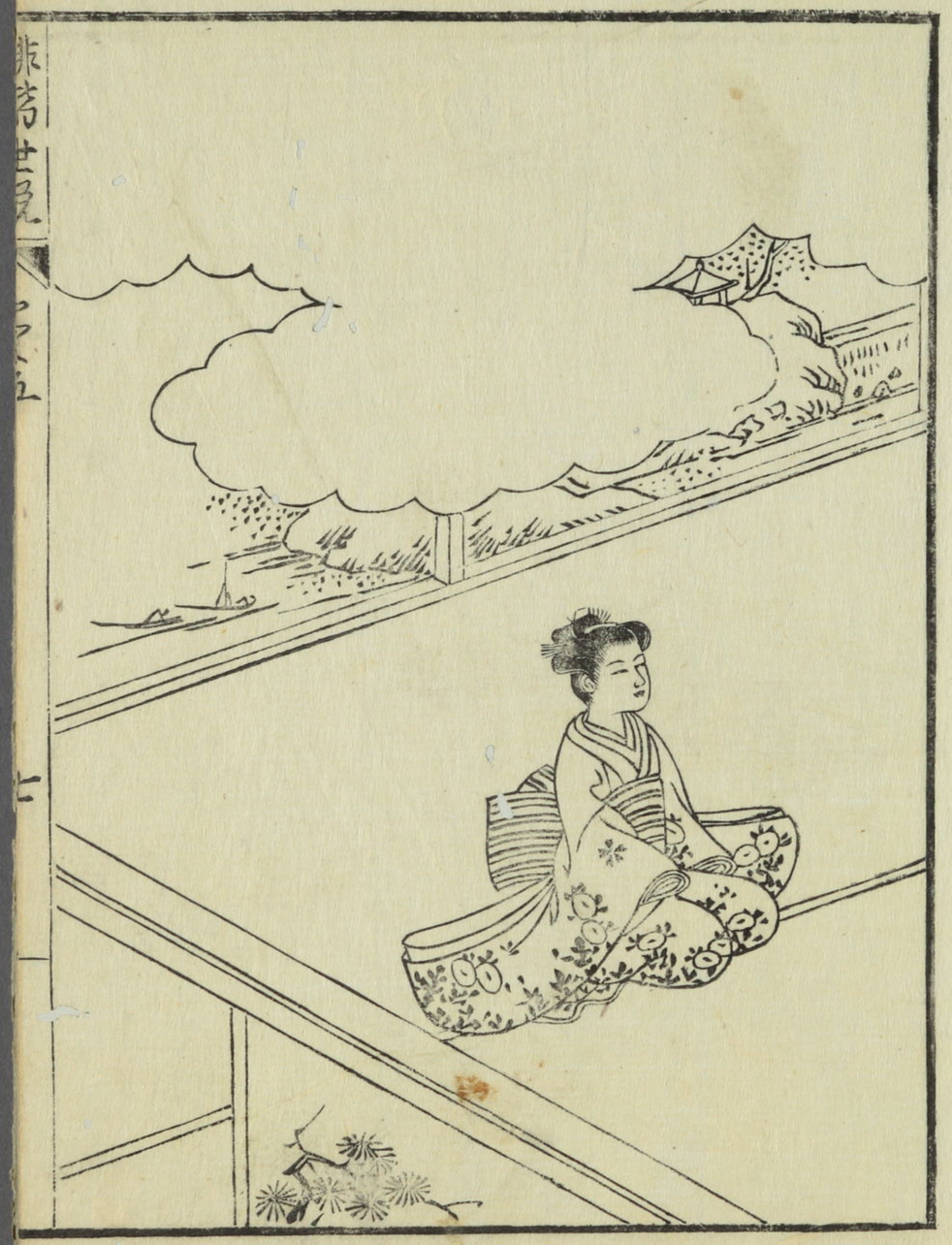
に定まれるひしとよ見えを法みて其徳紙かくしてゝ古人
の為にましまして復追の韓紙附乞続人日ある人
の従よし細翁近比の復杉風と支考と縁交して
支考もし東武に御を入ハ西御を切たらんと杉
風がつらなれどもう湛する妄説なり牧童か草
刈笛集に杉風より支考への文面を載たり其詞もよ
是をかりしや常にも世に伝えし得しもあらば
家と吟しく紙をもすゞさむ於斗りて　諸
手がみこの紙に一西年の内に返答の句

を待ってそこにいくか痛苦をうけ
数のを称も遊者こえ男女の間　杉風
足外り蕉翁誠坂のうすもろ紙おぼろ
坂城をこえみちの古人の足跡紙編して紙をも
なやまち人をも惑ハしむる古人の書を博く見
ける社廉会ハ云すぐる人をくも情ハ人を風
雅の衆人をすや

越人回懐の句を吟ずる說

尾張の越人を蕉翁の下葉ゝる社門人をし

ある年ハ翁の行脚を供し侍人をを待ける
事なりしに何しゝ物發ん乃志もをえ
を女をを出入る事も侍らを翁ハ其終をあら
ををるを懐を抱人くるや其侘れ物ハ越人
亭子足もをを見ぬ物ぞを乳ゝをしてつの也
なくもひもうををるひをと越人侍ゝ悔ひく
ゝゝ心ゝ思ひをる時痛乃恵　越人
かくいかゝらゝををぞ翁も此慚愧をゝみし
侍ひ侍の撰集子此句をも加入ゝををを実や



色を君子の戒むる所なれと又世の危のそこ
なき風情なれはさしはなはたひてそのわと
ふれを知るもて流の人こゝろ入なるを

吉原妓女奥州の說

奥州ハ其師匠なる東都吉原の妓女
にて蕉翁の世ふ風流の種を切撰集ふ發
句に加へ給へるゆへ門人中にもたれ者ありて笑ふもきゝうん
とゝろ時奥州はゆ涙をなかく

哀乞ゆ涙なかく吟ふ事部ニ奥州
とハ名ふれ給ふ妓ふ世ふ俳諧のかなるとて
尼ふ其ふ云

かなしさよ思ひ入るまゝ俳諧なる中なる歌きんふ
加賀ふ笑ふなる人のたゝくなりけふふれよみて
ハ人ふふれ事なふ

梅貞の句蕉翁一見の說

梅貞ふ彼京ふ山の奉ふていふ句ふより拙俗を
このゝ中ふ出ふるふ

山寺や只のぼりくらう二三本　梅眞

蕉翁小杉柳の投宿し給ふ事ふる事
など給へとも其投翁行脚遠化あるしゆゑ
此小翁の電賢伝聞ちらの白雪しらん人は

行くうて水ととせうら杜若　仝

とうとうとして人々称賞れるふるさとやく
ちくして貴氣此旅人結庵風雅の達人と
先ひしいに続くべきのものるとや

北枝従吾が命終を歎説

従吾ら小枝が門人うてこは一日も相逢せうるす
ゆゑかくて従吾病此床うに和うるとうる日毎ふ
交うたる友うまばと小枝此角も好くうしひ
湯粥此枝始とうもくうに給うふとあくを給うら病ひ
日々に重うりうや治療の粥薬うとはくを投々
はうふ病あく従吾とは志うるうるの朋友の作
とを見うとうもうそうに法うに屋をけるもはうしとそ
くて従吾命終うぬとは小枝あくて変うの殯宮ふ
入く其枝とたき従吾くとうとうとすそうと并う云て其紀

を大変紙上で注出を作りぬ和名をそ[illegible]
人の出るとて写して相ち山紅葉ちく人ら絵しハ宝
其ふ巻ハ塔亀ふる故ふる紙をそ[illegible]て作なの
交を深ふる紙を家ふ小枝ゞ形恰を稲荷ちふ[illegible]
て

風国集の題号と諸説

洛の風国ち蕉門ち一方をそのむ[illegible]なのそ[illegible]ち
しらいとふく自己ハ[illegible]ゆふ[illegible]伯和集のだ[illegible]
ふふる書紙出て併亡ゞ識ふ紙ふ[illegible]風雅の
名紙下しをれハ己ふ才れ度ふをちふ[illegible]ふや

あふふ初蜂巣の香二集の題号紙あやまちて世の
人い安下代俳士のやうにふ

三月乃秋をちふやまれと　風国

とふ白ち其けの人ふ及ふ紙一箱を好ふ
ふとふ[illegible]ふ俳士のいふふ廉ふふ
名を安下代ふ撰集ふを用ひふ乃
あやまちて情ひふ[illegible]ふ今の世も
和ふふ下代物語紙あふ紙下ふ
其名を發しふふ次乃古人の形恰ふ紙ふ

書にあく妄誕なるもどもを入れ世を惑はし乃
相成ぬしたるものもあらぬうとく撰集たて
い一場のうき稼業なりしく是迄切張して世に行ふ
ぶれとなるこゝをたく十月のころ不を恐るべし

誹諧世説五之巻終

半化房發句集 板行出來
俳諧世説後扁 未刻
同 蓬萊嶋 全三冊 出來
蕉翁文集

天明乙巳春
平安書林
浪花書林
御幸町通姉小路上ル町 菱屋孫兵衛
寺町通二条下ル町 林權兵衛
麩屋町通三條上ル町 大和屋吉兵衛
三條通御幸町西入町 菊舎太兵衛
心斎橋筋 塩屋忠兵衛